

# 北村 雅良 社長に送付しました

2014年12月16日

電源開発株式会社の大間原発に対する新規制基準への適合審査申請に抗議する

大間原発訴訟の会 代表 竹田とし子

11月13日、電源開発(株)北村雅良社長が大間町、風間浦村、佐井村と青森県を、江藤常務が北海道、浦島常務が函館市を訪れ、大間原発建設工事の「工程」と「申請内容」の説明を行った。

安全対策工事の「内容」は以下の通りである。

- ①基準地震動を450ガルから650ガルに引き上げる
- ②想定される最大津波を4.4mから6.3mに引き上げる
- ③フィルター付ベントを設置する
- ④追加工事費用は約1,300億円

電源開発(株)は2020年12月に工事を終了し、21年度には運転開始を目論んでいることを今回明らかにした。なぜ基準地震動を450ガルから650ガルに引き上げたのか、どの地域をどのような方法で調査して、そのような結論に達したのか説明すべきである。また、想定される最大津波4.4mを6.3mに引き上げた根拠を示すべきである。さらに、世界で初めて火山帯の上につくられる大間原発の火山対策はどうなっているのか、についてもきちんと大間町と周辺市町村(もちろん函館市を含めて)に説明すべきである。安全審査の過程で、火山の専門家から恐山火山地域はいくつかの火山が集合しており、集合で新しいカルデラが生じる可能性があること、銭亀火山は噴火の可能性がないわけではなく、海底50mに噴火口があり、噴火した場合には、津波が発生する可能性があるとして指摘されていた。

大間原発はフルMOX燃料を全炉心に装荷するので、いったん事故が起こったときには中性子線が1万倍、アルファ線が20倍放出され、被害面積はウラン使用の原発に比べて4倍になる。ほとんどの函館市民や道南住民は逃げる事が出来ない。

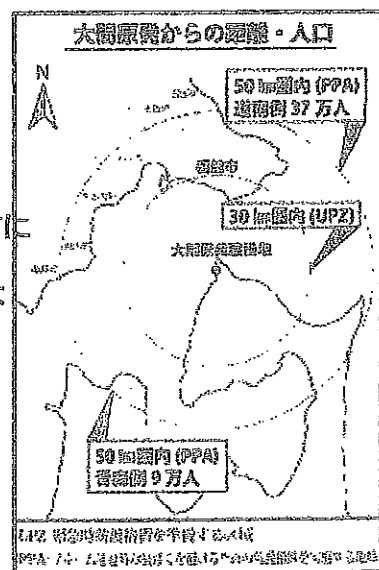
不安を抱いている大間町と周辺市町村の住民に対する説明は、電源開発(株)の義務であると考えると同時に、こうした義務さえ果たすことのできない今回の審査申請が妥当と評価できる筈もなく、電源開発(株)は大間原発の建設を断念すべきである。

# 大間原発をたててはいけない 10 のわけ

- 1 大間原発は世界で初めてのフルMOX  
.....1年間に6・5トンのプルトニウムを使用する
- 2 電源開発は原発を建てたことがない  
.....世界で初めての危険な実験が大間で行われる
- 3 大間原発から函館市まで 23 キロしかない  
.....隔てるものがない海を超えてやってくる放射能から逃げるすべはない
- 4 大間原発の 50 キロ圏内は、青森の 9 万人に対し道南は 37 万人  
.....しかも電源開発は北海道で一度も住民に対して説明会を開いていない
- 5 火山帯のど真ん中! 大間原発は東日本火山帯の上に建設  
.....火山が噴火すると降灰や津波が原発を襲う
- 6 大間原発付近の海底には長大な活断層が存在する  
.....地震が起きればマグニチュード 7 クラス
- 7 原発から出る毎秒 91 トンの化学薬品まじりの温廃水は海を壊す
- 8 大間原発はプルトニウムを燃やすための原発、ゴミ処理のためにつくられる  
大間がなければ核燃料サイクル中止

六ヶ所再処理工場もいらない

- 9 津軽海峡は国際海峡。  
.....大間原発はテロの絶好の標
- 10 行き場のない MOX 燃料廃棄物は永久に大間町に  
...猛毒のプルトニウムを何万年も管理するのは  
未来の世代。電気を作らない原発の定期点検、  
廃炉作業で未来の子どもたちが被曝する



資料:「大間とわたしたち・赤糸につながる会」 野村 保子